

主 題：初めの愛に立ち続ける

聖書箇所：ヨハネの黙示録 2章1-7節

テーマ：この新たな一年も”初めの愛”に立って、主のわざに熱心に励んでいくこと

新たな一年を始めるにあたって、今朝皆さんとともに考えたいこと、それは「初めの愛に立ち続ける」ということです。聖書をお持ちの方はどうぞヨハネの黙示録2章をお開きください。ヨハネの黙示録2章、特に1～7節のところから学んでいきたいと思えます。その内容に入っていき前に、皆さんは新年の目標というものを立てられたでしょうか？私は立てました。おそらく人それぞれにいろいろな豊富があることだと思えます。数日前、ネットの記事を見てみると、そこにはさまざまな目標を掲げている人たちがいるのを見ました。お金を貯めるや仕事や勉強がんばるといふ人がいれば、からだを鍛える、ダイエットをするという人もいました。新年の目標を継続することが目標だといふ人もいました。また信仰者の皆さんであれば、この一年で聖書をすべて通読するとか、もっと祈りの時間を取る、教会で奉仕をするとか、謙遜において成長するなど、いろいろな目標を掲げられたことだと思えます。今その目標を目指して一生懸命取り組もうとされているかと思えます。それらはすばらしいことです。でも皆さん、私たちは時に、ある弱さを覚えることがあります。どんな弱さかといえ、私たちが数多くのすばらしいことを熱心に行っていく中で、次第にそれらに追われ、本来の目的、なぜそれを行っているのかを忘れてしまうということです。そんなことはありませんか？最初は心から喜んでやっていたものが次第にやらなければいけないからといった義務的なものになってしまったと…。

今回この黙示録のみことばから考えていきたいことは、まさにその点についてです。新たな一年を迎えて、それぞれにたくさんの方が今年も待っていることでしょう。だからこそ、どんな時も私たちは正しい動機を覚えるということ、初めの愛に立ち続けるということが重要になります。では、初めの愛に立ち続ける、とは具体的に何を意味するのか、きょうはそのことをともに考えてみましょう。では、いつものようにまずみことばを一度お読みしますので、黙示録の2：1-7を見てください。

黙示録2：1-7

「1 エペソにある教会の御使いに書き送れ。『右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方が言われる。：2 「わたしは、あなたの行いとあなたの労苦と忍耐を知っている。また、あなたが、悪い者たちをがまんすることができず、使徒と自称しているが実はそうではない者たちをためして、その偽りを見抜いたことも知っている。：3 あなたはよく忍耐して、わたしの名のために耐え忍び、疲れたことがなかった。：4 しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。：5 それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行いをしなさい。もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。：6 しかし、あなたにはこのことがある。あなたはニコライ派の人々の行いを憎んでいる。わたしもそれを憎んでいる。：7 耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者に、わたしは神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べさせよう。』」

○歴史的背景

●手紙の宛先：エペソにある教会

さて、この箇所の内容を考えていく上で、私たちは初めにこの手紙がだれに宛てて書かれたのか、手紙の宛先と、まただれがこのメッセージを書き送ったのか、手紙の差出人を一節から見る事ができます。1節を見ていただくと、まず宛先について「エペソにある教会の御使いに書き送れ。」とありました。ここで「御使い」と訳されていることばは、私たちが思い浮かべるような天使のことではなくて、「教

会のリーダーや長老たち」のことを表しています。要するにこの手紙は、エペソの町にある教会のリーダーたちに宛てて書き送られたものだということです。そしてもっと言えば、そのリーダーたちを通して、キリストはエペソの教会の兄弟姉妹に対して語られていました。皆さんも教会があったエペソの町についてはよくご存知だとは思いますが、これから見ていく内容を正しく理解するためにも今一度、どのような場所だったかを思い返してみてください。エペソは小アジア、現在のトルコの西部に位置する場所に存在した重要な都市でした。どうして重要だったのかにはさまざまな理由を挙げることができます。少なくとも大きく三つの理由がありました。

まず一つ目に、このエペソの町は海や川に近くて、当時のアジアの最大の港があったために、大きな商業の中心地として栄えていました。またこの町は小アジアにあったほかの重要な町々とも公道でつながっていたために、港に届くものがエペソを経由してあらゆる地方へと運ばれていました。商品や人、いろんな物が絶え間なく行き交うその町は豊かな富であふれかえていたのです。

二つ目にエペソの町は商業の中心地であっただけではなく、宗教の中心地としても有名でした。この町には古代世界の七不思議の一つであるアルテミス神殿が存在し、そこにまつられていた大女神アルテミスを、当時多くの人たちが熱く礼拝していました。また、このアルテミス神殿の境内は神聖な場所であると考えられていたがゆえに、そこにはどんな法律も適用されなかったのです。その結果、どんなに酷い罪を犯した人でも、神殿の境内の中に逃げ込みさえすれば罪をとがめられることはなく、安全に過ごすことができました。その場に行かなくても想像できません？たくさんの物や色々な地方の人々で町はあふれていて、熱心に偶像礼拝する者たちがいれば、我先にと神殿の中に駆け込んでいく犯罪人たちもいました。富や欲望に満ちたこの町は悪の温床のような場所と化していたのです。古代ギリシャの哲学者ヘラクレイトという人物は、そんなエペソの町をこのように描いていました。「誰でもエペソに住む者は、至る所で目にとまる不道徳に泣かないわけにはいかない。」と。エペソという都市は経済や宗教、文化などにおいて発展した重要な中心となる場所であるのと同時に、悪がはびこる犯罪の中心地でもあったのです。しかし、エペソが重要だったのはそれだけの理由ではありません。

三つ目にこの町は、教会の歴史の面から見ても非常に大きな意味を持つところでした。振り返ってみれば、使徒パウロはほかのどの都市よりもエペソの地に長く滞在し、約三年もの間、人々を教えていました。その当時、最も優れた最高の教師の下で彼らは学んでいたのです。パウロはひとりひとりに日々熱心に仕えました。だからこそ、彼らとの最後の別れの時の様子が使徒20：36－38にこのように記されています。「：36 こう言い終わって、パウロはひざまずき、みなの方とともに祈った。：37 みなは声をあげて泣き、パウロの首を抱いて幾度も口づけし、：38 彼が、「もう二度と私の顔を見ることがないでしょう」と言ったことばによって、特に心を痛めた。それから、彼らはパウロを船まで見送った。」パウロはこのエペソの教会を心から愛し、教会もまたパウロのことを心から愛していました。彼らは非常に深い関係にあったのです。パウロは去って行きました。その後、教会は、今度はテモテによってみことばを教えられました。そして、その後はヨハネからもみことばを学んだと考えられています。この地にはほかにも、プリスキラやアクラ、アポロと呼ばれるすばらしい信仰者たちがいました。だからもし、私たちが教会の歴史上最も教理的に正しい教会、最も聖書の教えに富んだ教会を挙げるなら、このエペソの教会を挙げることもできるかもしれません。それぐらい、エペソの教会は数多くのすばらしい教師たちからみことばを学んで、そしてその結果、人々のうちにキリストの福音が深く根ざしてありました。これが手紙の宛先であったエペソにある教会の姿でした。

●差出人：イエス・キリスト

次に、だれがこのメッセージを書き送ったのか、その差出人についても1節に記されていました。「右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方が言われる。」と。確かに、ここでヨハネは具体的に名前を出しているわけではありません。しかし、この方がイエス・キリストを表しているということ

は、1章から続く文脈を見れば明らかです。最初であり、最後であり、生きておられるお方、死とハデスとのかぎを持った栄光ある主イエス・キリストが、エペソの教会に対してメッセージを語っておられるのです。

そして、ここで特に注目してほしいポイントが二つあります。それは、ここで出てきた二つの動詞「持つ」と「歩く」です。まず、「持つ」という動詞ですが、これは単に何かを手の中に持っているということではありません。これは何かを力強くつかんで自分の意思で決して離さない、そのような姿を表すことばです。何かを力強くつかんで決して手放そうとしないのです。

では皆さん、ここでキリストは何を持っておられると言われていましたか？ここでは「右手に七つの星を持つ方」というふうに言われていました。七つの星を持っておられるのです。では「七つの星」とは一体何でしょう？黙示録1：20を見ていただくとこう書かれています。「わたしの右の手の中に見えた七つの星と、七つの金の燭台について、その秘められた意味を言えば、七つの星は七つの教会の御使いたち、七つの燭台は七つの教会である」と。

▶七つの星：七つの教会の御使いたち

七つの星は、七つの教会の御使いたちのことでした。つまりまとめるとこういうことです。イエス・キリストはエペソ教会の御使いたち、エペソの教会のリーダーたちをその手にしっかりと持っておられると。言い換えれば、教会全体は、完全にキリストの支配下にある、ということです。ここでのポイントは、教会の真の所有者がほかのだれでもない、かしらであるイエス様だ、ということです。主権者であり、権威あるお方が、力強く教会のすべてのことを支配されていると言われていているのです。

▶七つの燭台：七つの教会

また続いて、持つだけではなく、今度は「歩く」ということばですが、このことばには、もともと「歩き回る」といった意味があります。歩き回るのです。かしらであるイエス・キリストは、教会の権威を持っているだけではなくて、七つの金の燭台の間、つまり教会の間を歩き回っておられるのです。これは、キリストがまるで監察官のように教会の中を歩き回って、ひとりひとりのクリスチャンの様子をすべてご覧になっておられる、ということです。この方は、それぞれを観察して、その歩みにふさわしい正しい評価を下されるのです。

ここで、私たちが覚えておかなければならないのは、この「持つ」も「歩く」も、どちらにも現在形が用いられているということです。つまり、この働きは、当時も今も変わらずに継続されているということです。キリストはかつて歩き回っていたけれど、今はその働きをやめられたのではなくて、キリストは今も教会の中を歩き回り、ひとりひとりのことを見ておられます。権威ある主が、私たちのことを観察されているというのです。だからこそ、私たちはこの方の前に立つ時に、だれひとりとして言い逃れをすることなどできるわけありません。主よ、あなたはこの日本でクリスチャンとして生きていくことがどんなに大変なことがわかっておられません。主よ、あなたは私がこんな状況に置かれていることをご存じないでしょう。忠実に歩むことがどれほど難しいか想像もできないでしょう…などと言うことはだれにもできないということです。なぜなら、主は私たちの間を歩き回っていて、エペソの兄弟姉妹のこともすべて知っておられたように、私のことも、あなたのこともすべてをご覧になって知っておられるということです。これは私たちにとって大きな励ましでもあり、同時に自分の心をよく吟味しなければいけないことでもあります。私たちの弱さをあわれんでくださり、私たちに助けを与えてくださる、そのようなことができるお方が、私たちのすべてを知っていてくださっていると。それは私たちにとって大きな励ましです。しかし同時に、この方は私たちが集って話している内容も、私たちが賛美や祈りをするときに心で何を考えているのかも、私たちがほかの兄弟姉妹をどのように扱っているのかも、そのすべてをご存知だということです。そのようなイエス・キリストがこの手紙の差出人でした。すべてのことを知っておられるお方がこのことを書かれていたのです。

○エペソの教会に対する三つの評価

さて、ここまで宛先と差出人について1節から考えてきましたが、今度は2節以降で、すべてをご覧になっているそのようなイエス様が、教会に対して評価を下されている様子を見てとることができます。特にここでは 三つの評価が記されていました。

その三つというのが、一つ目に神様の前に称賛される点、二つ目は神様の前に非難される点、そして神様からの警告です。それがこの後続いて出てきます。一つずつ順に見てみましょう。

1. 神様の前に称賛される点 2-3, 6節

まず初めに、エペソの教会の称賛される点が続きの2節にこう出て来ていました。「わたしは、あなたの行いとあなたの労苦と忍耐を知っている。」ここで改めて目を留めて欲しいのは、この「知っている」ということばです。これは私たちの持っている知識とは違って、「キリストの完全な知識」のことを表しています。私たちが持っている知識は欠けたところが多々あります。私たちには知らないことがたくさんあるので知らないことが出てくる度に、私たちはそれを本やネット、また人から学んで新しい知識として蓄えるのです。しかし、キリストはそうではありません。主はすべてのことをご存知です。今見たように、ご自分で教会の中を歩きまわり観察されているからこそ、だれかに教えてもらう必要がありません。キリストは良いことも悪いことも教会についてすべてのことをご存知なのです。そしてそのような完全な知識が、この後出てくる評価、称賛や非難の基準となるのです。だからこそ、その主からの評価に対して、「間違っています」と言える人はひとりもいません。そのようにすべてを知っておられる主が、最初に言われるのです。「あなたの行いと労苦そして忍耐をわたしは知っている。」と。ここで「労苦」ということばが出てきました。この「労苦」とは「肉体的にも精神的にも感情的にもすべてを使い果たして疲れ果てるほど働く」といった意味を持っています。間違いなくエペソの人々は、キリストの救いのためにすべてをささげて、キリストの栄光のために働く、そのような人たちでした。彼らはキリストのために持てる自分のすべてを使い果たして仕えていたのです。またこの人たちは忍耐を持っていました。ここで出てきている「忍耐」ということばは「厳しさや苦しみ、試練の中にあっても、その状況を受け入れて何に左右されることもなく勇気を持って困難に立ち向かう」そういった意味を持っています。エペソの兄弟たちの労苦と忍耐を私は知っていると。

ここでもう一度、彼らが置かれていた状況を思い出してみてください。彼らの住んでいたエペソの町は経済的にも文化的にも非常に繁栄した町でしたが、同時に多くの悪がはびこっていました。人々の間では罪や不道徳があふれ、偶像礼拝が町に大きな影響を及ぼしていたのです。その中であって、彼らはキリストの使徒としてみことばに忠実に従って歩もうとしていました。彼らのことを軽蔑したり、おかしな目で見るような者たちがたくさんいたことでしょう。迫害や困難、中傷やあざけりというものがあったことを容易に想像することができます。そんな厳しい状況の中に彼らはいたのです。しかし彼らは、パウロやテモテから受けたキリストの真理と福音を伝えるために懸命に働いていました。一生懸命にそのことを行っていたのです。彼らは「時が良くても悪くても変わらずにみことばを伝えなさい」と聞いた通りに語り続けていました。

またそれだけではなくて、エペソの兄弟姉妹は、主の真理に反することをよしとすることは決してありませんでした。彼らは悪や罪に対して妥協することは決してなかったのです。2節続きにこう書いていました。「また、あなたが、悪い者たちをがまんすることができず、使徒と自称しているが実はそうではない者たちをためして、その偽りを見抜いたことも知っている。」彼らは、かつてパウロやテモテから教えられて警告されていたことを決して忘れることなく、その教えに則って歩もうとしていました。覚えていますか？パウロは自分がエペソを去る際に、エペソの教会の長老たちに対してこんな注意を施していました。使徒20：29-30に「29 私が出発したあと、狂暴な狼があなたがたの中に入り込んで来て、群れを荒らし回することを、私は知っています。30 あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟

子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。」と。そして実際どうなりましたか？パウロが言っていたことが現実のものになったのです。エペソの教会の中には、偽りの教えをする者たちが、外側からも内側からも入り込んでいました。だからこそ、パウロが去って数年後に書かれたテモテへの手紙の最初でもこう言われていました。I テモテ 1 : 3 - 4 に「:3 ある人たちが違った教えを説いたり、:4 果てしない空想話と系図とに心を奪われたりしないように命じてください。そのようなものは、論議を引き起こすだけで、信仰による神の救いのご計画の実現をもたらすものではありません。」と。このように歴史を見てきた時に、エペソの教会は、混乱をもたらす偽教師や真理をねじ曲げようとする悪の教えと絶え間ない戦いをしていました。またそれらに加えて黙示録の 2 : 6 には、「ニコライ派」と呼ばれる人たちに触れていることも見て取ることができます。「ニコライ派」に関して詳しいことはよくわかってはいませんが、おそらく彼らは、キリストにある自由の名のもとに、偶像にささげたものを食べ、性的な不品行などを推奨しているそんな異端でした。神様の前に忌みきらわれることをしている人たちだったのです。ですから、いつの時代でも主の憎まれることを行うような間違った教えは存在していました。

しかし、エペソの人たちはみことばの真理を繰り返し教えられてきたからこそ、何が正しくて何が偽りなのかをしっかりと見極めることができたのです。彼らは偽りにだまされるのではなく、主のためにみことばに立って熱心に働いていました。彼らはみことばを熱心に語って、困難に耐えて、試練に立ち向かって、悪や異端に対しては真理を持って徹底的にそれを拒んで、からだも心もヘトヘトとなるまでに主にすべてをささげ仕えていたのです。だから 3 節でこう記されていました。「あなたはよく忍耐して、わたしの名のために耐え忍び、疲れたことがなかった。」と。彼らはどのような状況に置かれたとしても揺るがされることなく主に忠実に仕えた、そんな信仰者たちでした。神様のために仕えることにおいて、彼らは疲れ切って立ち止まることもありませんでした。もうしんどいです、もう限界です、これ以上はできませんとなることはなく、どれほどの困難があろうとも自分自身のすべてを神様と人にささげ続けていたのです。

2. 神様の前に非難される点 4 節

●初めの愛から離れることの問題

皆さんこれを聞いてどう思います？とてもすばらしい神様の前に喜ばれるそんな信仰者だと思いませんか？イエス様はそのことを称賛されていました。しかし、それで終わりではなかったのです。このように称賛を述べた後で、4 節で、主は衝撃的なメッセージをエペソの教会に対して与えるのです。4 節にこのように続いていました。「しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。」エペソの教会の非難される点として、エペソの人々が初めの愛から離れてしまったのだと、責めていました。主は言われます。「あなたたちは本当にすばらしいことを数多く行っています。神様の前に正しく賞賛に値することも行っています。でもただ一つ非難するところがあります。あなたたちは初めの愛を失ってしまった。」ここで覚えていて欲しい大切なことは、イエス様は「彼らが愛を全く持たなくなった」とは言っていなかったということです。そうではなく、「初めの愛を失ってしまった」「初めの愛から離れてしまった」と言われました。つまり、彼らは神様に対しても周りの兄弟姉妹に対しても愛を示すことは示していたということです。しかし、かつて一番初めに持っていた愛からは変わってしまった、愛が覚めてしまっていた、ということです。確かにエペソの教会はすばらしい働きをしていました。表面上は問題のない教会に見えたのです。しかしながら、その内面は深刻な問題を抱えていました。彼らは初めの愛から離れてしまったのです。

では、この「初めの愛」とは一体何のこといのでしょうか？これは、私たちが初めてイエス・キリストを自分のものとして知ったときに、心の内に生じる主に対する純粋な愛です。キリストが愚かな自分のために十字架の上で代わりに死んでくださって罪の赦しを与えてくださったのだと、そんな神様のあまりの愛の大きさを覚えるときに、心から湧き上がってくる神様に対する感謝、神様に対して燃え上

がるそのような愛のことです。思い返してみてください。皆さんがキリストを自分の救い主として初めて信じた時、皆さんは喜んで罪から離れようとしたはずです。なぜですか？なぜ私たちはキリストによって救われた時に、喜んで罪から離れようとしたのでしょうか？それをしなければいけないからですか？そうではなく、ただ自分を救ってくださった神様を愛してこの方に喜ばれる者になりたいとそう願ったからです。神様を礼拝することも教会で奉仕をすることも、ほかの兄弟姉妹に仕えることも、自ら喜んでしようとしたはずです。そこにどんな犠牲があったとしても、それを厭うことをしなかったはずです。なぜですか？それは、神様を心から愛するがゆえに、同じように救われて神の家族とされた者たち、兄弟姉妹を愛したいと願ったからです。私たちがどれほど大きな神様の愛を受けたのかということを知ったときに、私たちは愛を示そうと願ったはずです。それが最初の愛です。そんな愛からエペソの教会は離れてしまいました。彼らは確かに正しいことをしていました。行っていたことは素晴らしいことでした。しかし、それらを行う動機が、もはや神様に対する愛ではなくなっていました。彼らは神様に対する感謝や愛からではなく、やらなければならないとの義務感ですべてを行っていました。そのことを主は厳しく責められたのです。

では、皆さんここで少し立ち止まって考えてみてください。一体どうしてイエス様は、初めの愛から離れるということが深刻な問題だと、ここで取り上げていたのでしょうか？彼らはたくさん素晴らしいことをしているからそれでよし、とはならなかったのでしょうか？もちろんいろいろな理由を挙げることはできます。しかし、少なくとも大きく二つの理由から、どうして大切なのかを言うことができます。

a) 第一、第二の戒めがそれを求めているから

まず一つ目の理由は、第一の戒め、第二の戒めがそれを求めているからです。イエス様がマタイの22：37-39でこう教えておられました。「：37 そこで、イエスは彼に言われた。「『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』：38 これが大切な第一の戒めです。：39 『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。」もし、救われた者に神様が求めておられることを一言でまとめるとすれば、「神様への愛」だ、ということができると思います。私たちは救われたときに愛である神様を知りました。罪過の中に死んでいた私たちを神様がキリストとともによみがえらせてくださったのです。神様に逆らって歩んでいた私たちに値したのは、ただ神様からの正しいさばきだけでした。しかし私たちが何かをしたからではなく、ただ神様の恵みのゆえにキリストによって信じるすべての者に罪の赦しが備えられたのです。だからこそ、そんな愛を示された者たちは、喜んで神様に愛を示そうとするのです。それこそがキリストの愛を知った者の自然な応答でした。ヨハネもこのように言っています。Iヨハネ4：19で「私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。」こうして心を尽くして神様を愛することは、神様の愛を知ったクリスチャンにとって最もふさわしい態度でした。また同時に、神様を愛する者たちは隣人も愛することをイエス様は求めていました。私たちは神様を愛しているからこそ、犠牲的に自ら進んで人にも愛を実践しようとするのです。イエス様も言われていました。ヨハネ13：34-35で「：34 あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。：35 もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」私たちが互いの間で愛を実践するということは、キリストのあかしを立てる上で欠かせない大切なものでした。だからこそ、たとえそれが自分にとって難しいこと、嫌なことであったとしても、(ある人にとっては赦すことかもしれませんし、ある人にとっては真実を告げることかもしれません)自分のことよりも、神様を愛するがゆえに、喜んで犠牲を払ってでもそれを成そうとするのです。私たちは神様によって愛を示されました。その応答として、私たちは神様を愛し、そして、人を愛しようとするのです。そしてもし、そのような愛がないのであれば、その人は最も大切な命令としてイエス様が与えておられるものに、背くことになるのです。

b) 愛がなければ、どんな行為も価値のないものになるから

また二つ目の理由は、愛がなければどんな行為も価値のないものになるからです。パウロはIコリント13章で、愛の重要性をこのようにまとめていました。私たちもよく知っている箇所です。Iコリント13:1-3, 13で「:1 たとい、私が人の異言や御使いの異言で話しても、愛がないなら、やかましいどらや、うるさいシンバルと同じです。:2 また、たとい私が預言の賜物を持っており、またあらゆる奥義とあらゆる知識とに通じ、また、山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、愛がないなら、何の値打ちもありません。:3 また、たとい私が持っている物の全部を貧しい人たちに分け与え、また私のからだを焼かれるために渡しても、愛がなければ、何の役にも立ちません。:13 こういうわけで、いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。」パウロが言わんとしたことは明白でした。たとえ、ある人が神様の前にどれだけ正しい行いをしていたとしても、そこに愛がなければ何の値打ちもないということでした。どれだけ熱心に神様と人々に仕えていたとしても、そこに愛がないのであれば意味がないのです。エペソの人々はまさにこの問題を抱えていました。彼らは初めの愛から離れてしまっていたのです。

しかしこの問題は、決してエペソの信仰者たちだけの問題ではありません。今を生きる私たちひとりひとりも考えなければいけない大切な問題です。大切なことなのでよく覚えてください。エペソの兄弟姉妹がそうであったように、私たちは、愛が冷めていたとしてもいろいろなことをすることができます。しかし聖書が教えているのは、神様の前に大切なのは外側ではなく内側だ、ということです。何をするかではなく、どのような心でしているのかが重要なのです。どうでしょう？ある人は教会に毎週忠実に通っているかもしれませんが。聖書を読んで祈って教会の中で熱心に働きをしているかもしれません。ある人は兄弟姉妹に仕え、未信者にも大胆に福音を語り続けているかもしれません。それらはどれをとっても素晴らしいことです。でももし、それらすべてを義務感だけでしているのだとすれば、もしくは、これまでそのようにしてきたからそれが習慣となっているのだとすれば、私たちが初めの愛から離れその愛が冷め切っているのだとすれば、神様の前にそれらは決して喜ばれるものではないということです。

エペソの兄弟姉妹は素晴らしいことをしていました。でもたった一つ、初めの愛から離れたことを主は非難されていました。そうだとすれば、あなたはどうでしょうか？考えてみてください。あなたが今成していること、この一年成そうとしていること、それらはキリストを心から愛するがゆえのものでしょうか？あなたの動機に何があるのでしょうか？もしそこに神様に対する初めの愛がないのであれば、それぞれがよく考えなければいけません。

3. 神様からの警告 5、7節

●三つの命令

エペソの教会は初めの愛から離れてしまいました。そしてそんな彼らに対して、主は最後に警告を与えておられます。5節にはこのように記されています。「それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行いをしなさい。もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。」と。主は初めの愛から離れてしまったエペソの人々に対して、ここで特に三つの命令を与えていました。

1) どこから落ちたかを思い出しなさい

まず一つ目の命令は、「どこから落ちたのかを思い出しなさい」と。思い出すことでした。キリストは言われます。「かつてわたしに仕えていたその姿を、かつてわたしのために喜んで生きていたその姿を、かつてわたしを熱心に愛していたその姿を思い出しなさい。」と。エペソの兄弟姉妹はまず、自分たちの歩みが以前とは違っているということ、本来歩むべき姿からかけ離れて罪を犯しているということに気づかなければいけませんでした。これは非常に大切なことです。なぜなら自分の歩みが神様の前

に何の問題もないと思っ込んでいる者は、決して自分の過ちを正そうとはしません。だからこそ、今一度皆さん、私たちもよく思い出してください。今、あなたの持っている愛や熱意は、救われた当初と同じものでしょうか？いや、その愛はますます歳を重ねるごとに深まっているのでしょうか？それとも、次第に冷めているのでしょうか？神様やみことばに対してはどうでしょうか？ほかの兄弟姉妹に対してはどうでしょうか？まだ主を知らない救いを必要としている者に対する愛はどうでしょうか？初めの愛と今の愛には、大きな隔たりがないのでしょうか？

2) 悔い改めなさい

二つ目に与えられていた命令は、「悔い改めをする」ことでした。かつての歩みを振り返って、自分自身が初めの愛から離れてしまったと気づかされた者は、神様に対して悔い改めるということが求められていました。悔い改めるというのは、180度向きを変えるということです。そのためには自分の過ちを何よりもまず神様の前に認めることが大切なのです。「神様、かつて私があなたに対して持っていた愛と今では違うものになってしまいました。私は、初めの愛をもってあなたや兄弟姉妹を熱心に愛していませんでした。こんな私の罪を赦してあわれんでください。」このように自分の罪を素直に認め、神様の前で告白するのです。神様の喜ばれる歩みをしていくためには、罪をそのままにして生活続けることなど絶対にできません。最初の愛に戻らずに、今していることを義務感だけすることは、神様の前に喜ばれないということ、この箇所が私たち明らかにしてくれています。だからこそ、キリストへの最初の愛を思い出して、そして悔い改めることです。

3) 初めの行いをしなさい

思い出すこと、悔い改めることに続いて、最後三つ目に与えられていた命令は、「初めの行いをする」ことでした。初めの行いをしなさいと。ここで私たちが覚えておかなければいけないことがあります。それは聖書の教えている悔い改めには、それに伴う行動が求められているということです。エペソの人々に言われていたのは、当初持っていた愛を思い出して、悔い改めて、それで終わりではありませんでした。彼らは初めの愛に戻って、それに基づいて主のために働きをなすことが問われていたのです。ですから、真の悔い改めというのは、ただ感情で終わるものではありません。以前のことを振り返って、自分が悪かったと認めるだけでもありません。また当然、自分の過ちを反省する代わりに、周りの人や状況を責めることでもありません。自分も悪いですが、でもあの人があんなことをしたからとか、自分がこんな状況に置かれたからといって責任を外になすりつけることをしません。心から悔い改める者は、自分自身が神様に対して罪を犯したことを悲しみ、それを素直に認めて告白すること、そして神様を何よりも愛するがゆえに、喜んでどんな犠牲を払ったとしてもその罪と向き合って主に喜ばれることをなしていくことです。思い出すこと、悔い改めること、そして初めの行いをすること、これらが初めの愛から離れてしまったエペソの兄弟姉妹にキリストが強く求めていたことでした。そしてもし、これらのことをしないのであれば、悲惨な結果があるということをイエス様は続けて言われました。5節の最後に「もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。」と。ここで出てきた「教会の燭台を取りはずす」というのは、「教会そのものがキリストによって取り除かれる」ということです。言い換えれば、「主が教会の燭台を取りはずされるとき、教会の存在が消滅してしまう」と言うことです。たとえその場にならぬ人が集まっていたとしても、たとえいろいろな働きがそこでなされていたとしても、その教会の中にはもう主が居られないのです。主は、悔い改めない教会をご自身の目的のためにはもう用いられることはないということです。これは非常に恐ろしいことです。しかし同時に、現実的なものです。考えてみてください。あれだけ素晴らしい教師たちに教えられて、あれだけ熱心に働きをし、神様の前に称賛される点がたくさんあったエペソの教会。その教会は今どこにあるのでしょうか？どこにもありません。あれ

だけ正しいことを行い、キリストのためにすべてをささげていた教会は、なくなってしまいました。どうしてか？それは、彼らが初めの愛から離れてしまったからでした。

これと同じことが、私たちには絶対に起こらないと言えるのでしょうか？残念ながら言えません。だからこそ、私たちひとりひとりの責任は、自分の信仰を常に吟味することです。自分自身に問いかけることです。私は初めの愛を持ってすべてのことを成しているだろうか？私はすべてのことを神様に対する愛のゆえに行っているだろうか？

そして最後に、主は7節でこのように言われていました。「**耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者に、わたしは神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べさせよう。**」と。ここで主が求めておられていたことは明白でした。「**耳のある者はだれでも聞きなさい、今語られたみことばに注意深く耳を傾けなさい**」と。きょう見てきたみことばは、エペソの兄弟姉妹だけのものではありません。「初めの愛をもって歩んでいますか？」という問いは、今の私たちひとりひとりにも投げかけられているのです。しかし同時に、ここでキリストはすばらしい約束を最後に与えておられます。「**勝利を得る者に、わたしは神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べさせよう。**」と。言い換えれば、心から主を愛して、その愛にどんな時も変わらずに立ち続ける信仰者には、天のパラダイスで主が永遠のいのちを与えてくださる、ということです。主は、ご自分を心から愛してどんな困難や戦いであろうとも主に信頼して勝利する者には、必ずすばらしい祝福をもって報いてくださると、そうエペソの兄弟姉妹を励まされたのです。

でも皆さん、どうして主は最後にこのような励ましを彼らに与えたのだと思いますか？ある意味、救われた者が天国に行くことも、永遠のいのちが与えられることも彼らにとっては周知の事実でした。では、どうして彼らに改めて天で用意されている祝福について、ここで告げる必要があったのでしょうか？それは、彼らが何のためにすべてのことをするのかに心を留めなければいけないからでした。彼らはこれまで見てきたようにいろいろなすばらしいことを行っていました。しかしそれは愛を動機としてではなく、義務感から行っていたのです。彼らが思い出さなければならなかったのは、何のためにそれをしていくかでした。

私たちにも同じことを当てはめることができます。皆さん、なぜ私たちは信仰生活を忠実に歩んでいこうとするのでしょうか？それは、ほかのだれでもなく神様がまず私たちに愛を示してくださり、その大きな愛を私たちが知ったからこそ、この主のために犠牲を払って仕えていこうとするのです。またそれに加えて、このすばらしい主に天でお会いして報酬をいただくその日を楽しみにしているからこそ、日々を忠実に歩もうとするのです。これが、エペソの兄弟姉妹が覚えなければいけないことであり、今の私たちにとっても心を留め続けるべき大切なことでした。

〇まとめ

そうだとすれば、この新たな一年を始めるにあたって、私たちにとって大切なことは、この主を見上げ続けることです。最も優先すべきその存在に、どんなことがあっても心を留め、この方を何よりも愛することです。この一年、良いこともあれば、困難や痛みで苦しみ、罪との戦い、葛藤を覚えて涙を流す日もあるでしょう。しかし、それがいつまでも続くわけではありません。それには必ず終わりがあります。私たちのために十字架にかかって死んでくださり、私たちに救いを与え、新しく生まれ変わらせてくださったそのお方に、天でお会いする日がいつか必ずやってきます。だからその日を心から楽しみにしながら、与えられた一日一日を主の栄光のために、初めの愛に立ち続けて、忠実に歩んでいきましょう。